

夢の芽生える文化と教育

『夢の芽生える文化と教育』

ただ今からお話をさせていただきたいと思います。

現状があるということは、まず背景があり、そこからきっかけが生まれ、そしてプロセスに移り、現状に至るという流れがあります。すなわち、因果関係が必ずあるわけです。ここをきちっとおさえ、哲学、思想を専門的分野を通じて社会で体得することによって、想像力、先見性、判断力、決断力を持った論理的頭脳が形成され、社会的立場が自覚できるようになり実行力が生まれる、と私は考えています。私が二十六歳の時に、私の勤務しておりました佐藤造機という会社が倒産いたしました。そこで農業機械の研究開発をして、全国、世界に普及する、という仕事をしておりました。私が入社した時は資本金二億円の会社が、八年後には資本金二十四億円の、一部上場会社になり倒産しました。

そういう中で青春を過ごしました。私は会社の中枢部門にいましたので、三年ぐらい前から、「このままだったら倒産する」ということを感じていました。いろんな所でその話をしましたが、誰も真剣に取り合おうとしてくれませんでした。そこで、私は安来の清水寺に行き、一ヶ月ぐらいの間、会社を休み、座禅を行っていました。「これからどう生きるか」ということを考えてやりましたけれど、結論は出ませんでした。そんな時に、父が地元の村会議員に立候補しました。私は「やめといてくれ。私の会社も危ないし、弟も失業して帰って来ているし、今ここで借金でも作られたらかなわない。」ということでもういぶん反対しましたが、地元の人に推されて立候補、そして落選いたしました。結果、借金だけが残りました。私に、家族の生活すべてがかかってきたわけです。

佐藤造機は昭和四十六年三月に行き詰まりました。この年は、一月に突風により日本海が大荒れに荒れ、たくさん漁船が流されました。また、二月に大雪が降りました。いわゆる“四十六年豪雪”です。そして、翌三月佐藤造機倒産とつづきました。分かったことは、「人はいつ死ぬか分からないから人生の計画は立てられない」ということです。当時、二十六歳の時ですから、三十歳まで生きられるのか、五十歳までか、七十歳までか。それがはっきりしないから、計画が立てられないのです。一ヶ月ぐらい座禅して寺から帰る時に、ハッと気が付きました。「これからどういうふうに生きるか」ということを考えるから、解らなくなる。

生まれたら必ず死ぬわけですから、「死ぬ時にどういうふうに死ぬか」ということを考えればよい」という事に気付いたのです。「楽しかった。いろんな人にお世話になった。ありがとうございます、さようなら」こう言って死ぬためには毎日をどのように生きれば良いか。

死を迎えた時の「言葉」を先に決めることによって、いろいろな経験を通じ

て、また正直・誠実・素直に生きることによって、人生を貫く目標が定まるのです。現実問題として、お寺、神社への出しものや付き合いも多く、金の掛かる旧家だったので高校卒のサラリーマンではとてもやっていけそうにない。家の中は火の車。「これは何とかせないかん。これはもう、商売やるしかない。」ということを考えてました。

京セラ創業者、稲盛和夫さんは、利己から利他へとおっしゃっていますが、私にとっては利他からのスタートでした。田舎のことですから失敗するとレッテルをはられ、身動きが取れなくなると考え、まず大阪へ出て商売の体験をし、郷里へ帰ってスタートしようと考えたわけです。

私は叔父に相談いたしました。ビルマ戦線から帰ってきた人でして、皆さんと同じく校長先生をしておりました。私はその話をしたら、『葉隠』を読んだことがあるか。その中に、「武士道とは死ぬこととみつけたり」と書いてあるといい、本をくれました。

私は本を読むのはあまり好きではありませんでしたから、「そんなものは読んでないよ。俺は自分で考えた。」と答えました。「分からなかったけれど、豪雪の中、清水寺の石段を下りる時にふと気が付いた。」と言ったら、「お前、大学へ行け。」と言うのです。私は「大学は嫌いだ。勉強するのは面倒くさい。」ということで、その後、家業・企業、そして事業家への道を歩んだわけです。なぜ、こういう話をしたかと言いますと、今日の論題が「夢についてのお話」ということだったからです。この「夢」というのは、どうやったら芽生えるのか。

よくいろんな方が「夢を持ちましょう」という話をなさいます。私はすかさず「荷物 じゃあるまいし、持てるものじゃないよ。じゃあ持ってみな」と言うのです。「言葉をよく吟味してから言ってくれ。人を惑わすようなことは言ってはいけん」と。私は、「夢は芽生えるものだ」と思っております。「芽生える」ということはどういうことかと言いますと、植物では芽が出る前に根が出ます。根が出て、それから芽が出るのです。では、いきなり根が出るか。そんなことはないですね。米にたとえますと、粳を水にかけて、中に十分水が入る。それを人が入った後のお風呂につけることによって、暖められて根が出るわけです。この根が出たものを苗代にまくわけであります。「我々人類というのは、生命連鎖の中の最終局面で出現した」このように言われております。ということは、植物のDNAも入っているわけです。「学ぶ」ということは、その気持ちさえあれば、自分以外はすべて「先生」であるということです。植物から、動物から、あるいは子供から。

しかし、「読み書き算盤」これを教える「教育」というところからおかしくなっているのです。

「教育」という言葉は、明治時代に作られたと思います。それまでは、「学問」という言葉でした。「勉強」という言葉はないはずです。こういう原点に戻って、もう一度おさらいをしてみる。

今はこういう時期にきていると思います。「今まではうまくいった」とか「昔はうまくいった」とおっしゃる方がいます。それは、環境が違うのです。私は1944年生まれですけれども、我々から三、四年後になりますと、あまり「ひもじい思いをした」という経験がない方が多いですね。我々の年代までは、結構ひもじい思いをしました。ということは、脳の中に、いかにして空腹というものを味わわなくてもいいような前段取りをしておくか、という安全志向が非常に強いのです。だから食事をしますと、つい早食い、食べ過ぎになってしまいます。いつもしかられます。「ゆっくり、少し食べなさい。」と言われてもできないのです。小さい時から、早く食べないとなくなってしまう。そういう中で育ったものですから。そして、「もったいない。」「残すといかん。」「明日食べられるかわからない。」それが、脳の中にインプットされている。

こういう人は、環境さえ厳しくすれば、放つといっても自然に夢が芽生え、希望が湧いてきます。

ところが、今の若い人たちは、「飢餓」、あるいは「殺されるかもしれない」、こういうことが人生経験に無い為、安全欲求回路が無いに等しいのです。直接的に「飢餓と殺戮」の恐怖がなく、且つ核ミサイルと衛星放送、インターネットという環境下で、大衆と指導者が出てきた。実はこのことは、人類の歴史上、日本以外では起こっていない状況なのです。つまり、歴史の中また世界のどこにも手本がなく、それゆえに、政治、経済、教育、人間社会のあらゆる問題をベースにして考えなければ、解決方法は見えてこないのです。

資料の中に、最後に御案内しておりますけれども、最近出た有名な本で、アメリカのドラッカーの『ネクスト・ソサエティ』（次の社会）を紹介させていただいております。その中に、こういう一節がございます。「今まで人類の歴史は、経済が社会を変えて来た。」たとえば、洗濯機やクーラーなどが家庭に入ってきて、家事における負担が著しく軽減され、家庭のあり方、つまり父親と母親の分業体制が変化し、個人と社会の関わり方も大きく変わってきました。「奥様」という言葉はいまや死語になりつつあります。食品に関しても、ハンバーガーなどのインスタント食品が次々に出現し、栄養面のバランスも一応考慮されています。包丁のない生活が始まったわけです。

経済が社会の規範や社会生活を変えていくとはこのようなことなのです。ところが日本では、世界で初めて、「社会が経済を変える」これまでと逆のことが起こる時代を迎えました。

よってドラッカーの『ネクスト・ソサエティ』は、日本で初めに出版されま

した。今までドラッカーの本は、すべて英語で出版され、その後日本語に翻訳されてきました。この本はただひとつの例外で、日本での出版を皮切りにして、全世界に紹介されています。

わかりやすく言いますと、三菱グループの中核企業、三菱自動車について「クレームを隠していた」と報道されると、あっという間に三菱の車を買う人が激減し、アメリカの会社の子会社化されてしまいました。また、雪印は業界トップブランドの超優良企業でした。この会社が、対処のまずさもあって、あっという間に存続できない状況になりました。日本ハム、この会社も同じように業界ではナンバーワンの会社であります。この会社もあっという間に行き詰まりました。東京電力、ミスタードーナツでも同じような事が起きています。インターネット、マスコミ報道により、人々の生活習慣や価値観が変わり「社会現象化」し、問題企業を破壊、それが業界他社、関連業界にも波及。経済が急速に収縮し、長期大不況に拍車をかけています。これによって何が起きるかと言いますと、「価値とは何か」ということをもう一度根本から再検討せざるを得なくなってしまいました。この現象が世界で最も早く起きたのが日本であります。

木の芽でも、これから酷寒に入る時には出ません。いや、そんなことはないですね。実は、出ているのです。葉っぱが落ちた時に、もうすでに出ています。私は、この田舎で育ちましたが、このことを知ったのは四十歳半ばでした。それまで、よく観察していなかったのです。

「木の芽は春に出るものだ」こういう具合に思い込んでいたわけです。ところが私も、事業でそこそこお金が回るようになったものですから、夜ゆつくり風呂に入りたいな、と思って、大きな透明のガラスの付いた、外の見える風呂を造りました。秋になりますと、葉っぱが落ちるわけです。何気なく葉っぱの落ちた跡を見ると小さなこぶがあるのに気が付きました。これを割ってみました。

そしたら、中に小さな緑の芽があることを発見したわけであります。私はその時、「なるほど、葉っぱというのは、落ちる前にちゃんと次の葉っぱの芽を用意して、バトンタッチをして落ちていくのか。」そして雪が降る。その間には絶対に大きくなる。春になって、「もう大丈夫だ。」「これだったら霜にやられない。」そういう時季まで極寒に耐え、鍛えられて今まで蓄えたエネルギーによって葉っぱは一気に大きくなります。四十歳半ばにしてようやくこういうことに気づいたわけであります。最近の若い子供たちに、夢がないということを聞きます。

それは当たり前です。夢が芽生えれば、あっという間に、世間の対応不可能な過酷な現実と情報に摘み取られてしまい、生きる希望さえも失ってしまうの

です。生命を持続しようという意志、そういうものは、DNAの中に組み込まれています。ですから、現状にのみ順応させることで物理的な生を持続させるという状況になっているわけです。子供たちに夢が芽生えない根源的理由はまともな努力をしても報われない社会の状況に子供たちが無意識に気がついていいる事が一番大きな理由であろう、ということに、私は昨夜気がついたわけであり、この資料は、一週間くらい前に作ったと思いますけれども、その時には気がつきませんでした。気付くということは、きりが無いのです。

うちの会社では「弁証法」ということをよく言います。目的目標を定め、具体的方法論としての「正・反・合」ですね。これを繰り返すことによって、新たな知を吸収しようとする意欲と知恵が生まれる頭脳ができてきます。先日は、素晴らしいニュースがございました。小柴さんと田中さん、この二人がノーベル賞を受賞された。本当に素晴らしく、おめでたいことです。

特に小柴さんは、「ニュートリノをとらえた」ということが受賞理由になっていました。その陰の力となった「光増倍管」という装置があります。光を増幅するというものですね。日本の、あるいは世界の「テレビの父」と言われる、高柳健次郎という方が、戦前、浜松にいらっしゃいました。「いろは」の「い」の字を電送する技術を造った方であり、この方の意志を受けて、「浜松テレビジョン」という会社が、戦後出来ました。民放が、「テレビジョン」という名前をつけるものですから、紛らわしいということで、「浜松ホトニクス」という会社に社名変更になり、お弟子さんの晝馬さんという方が、現在社長をなさっています。私は、この晝馬さんと、ある縁がありまして、今から十年近く前であり、この光増倍管の研究所を見せていただいたことがあります。その時に、いろいろとお話を伺っておりまして、先日テレビに出ておられるのを見て、自分のことのようにうれしく思いました。

葉っぱから人物創造学を考え、籾の発芽から人材養成学を学ぶ。籾の発芽のプロセスを観察すると、籾の中に水分が充満するのを待ち、保温する。すると、一斉に根が出る。苗代にこれを撒くと、一斉に芽生える。これを人間に当てはめて吟味していく。知の欲求、なぜなぜを繰り返すプロセスの中で頃合を見はかり、愛（授けるけど求めない）を感じずる環境を整える。このことが「夢が芽生える教育」の原点だろう、と考えております。

では、夢が芽生える原点は、一体だれが造るのか。それは母性だと私は考えています。

しかしそれが希望、そして現実のテーマとしての目標設定そして実現へ向けての努力へと行動が始まる為には、「人物」の登場が不可欠となります。人物とは、「志」が優先するものです。困難を次々と克服する中で求心力が生まれ、人々に畏敬の念と安心感を与え、「人物に人徳」が備わります。

次に、パートナーについてお話致します。パートナーには、「人材に人望」がキーワードになります。今、リーダーに何が欠落しているか。それは「人望」であります。では、「人望」はどうすれば身につくのか。それなりの成功を収めた人が、自分の失敗談を話せばよいのです。「あの人もそんな失敗をしてきたのか。私はあの人のようになりたい。」「成功したい」、という具合に言われている人の失敗談を、若い人たちに聞かせればよいのです。そうしますと、彼らには勇気がわいてきます。つまり聞いている人には「希望と勇気」がわき、失敗談を話す人には「人望とゆとり」が生まれるわけです。「人物」は「天のそして時代の申し子」であります。その人の生まれ育った時代、あるいは、その人の持っている「運」、いろんなものが重なり合って、人間の力では何ともしがたい要素も相まって、人物というものは生まれるわけであります。我々が人工的に作れるのは、「人材」であります。そして限界を超え困難な時代になった時には、人物と人材の両方の素養を持った人間が登場してくるのを待つしかないわけあります。人間である以上できることと、できないことがございます。

私は平成四年に中小企業研究センター賞、全国二人目のニュービジネス大賞、優秀経営者賞、地方社会貢献者賞を頂いたことがきっかけとなり、今千葉商科大学の学長をなさっています前税政調査会委員長 加藤寛先生、当時秩父セメント会長 諸井虔先生、長嶋巨人軍監督と一緒に、東京新春経営者セミナーで講演をしたことがございます。その時に、竹下蔵相プラザ合意円高容認の対応の過ちによって、「もう日本は臨界点を越えた。この流れは、生身の人間では変えることはできない。敗戦の原因をつきとめ、教訓としなかったことによって生まれた日本の社会情勢では、方向転換もできない。『ノアの箱舟』を造る。それ以外に方法はない。」ということをお話いたしました。今から十年前のことです。その時の講演テープがありますので、もしご興味のある方は、メールでお申し付け下さい。後日お送り致します。

最近、政府、日本銀行は、かつて歴史がやったことがない、あるいはそれをするによりすべてが崩壊してしまった、そういう施策を次々と打っております。残念ながら手遅れであります。5年ほど前に、当時の中国首相と、オーストラリア首相が公の場で、「そう遠くない将来、世界地図の中から日本は消えるだろう。」ということを発表されたということから、東京日航ホテルで五百余名出席のシンポジウムがございました。

元伊藤忠商事会長・元大本営陸軍海軍参謀、瀬島龍三先生の講演を受け、元ニュービジネス協議会副会長 前野徹先生等数名の著名人のパネルディスカッションが行われ、私もそこに出席しておりました。私はこの大きな流れは、だれも変えることはできない。しかし、かと言って、この日本の島が、日本海に、太平洋に沈むわけではありません。この日本列島には、同じようにたくさん

人が住んでいる。このことは変わらないと、私は思います。しかし、この日本列島の中で、いろんな国の人たちが暮らす。こういう時代がやってくる。後から来た人たちと相手の立場を尊重しながら秩序立った中でそれぞれの役割分担をしながら生きていく。

こういうしくみと文化が生まれる流れを作っておくことが、今生きている我々の役割だと思うのです。もちろん、大事は中事でそして中事は小事で終わるよう、また小事は中事に、中事は大事にならないよう努力することは、言うまでもありません。最悪の場合を想定し、腹を据え、それに対処できる状況を整えた後、高い目的・目標を目指す。状況によっては、臨機応変に最善、次善に目標を変更するわけです。

私は校長、教頭先生といろいろお話ししますと、「本当に大変だな」とつくづく思います。予算、予備費に余裕が無く、ほとんど海外にも行っておられない。そして、本音しか通じない子供が相手。部下である先生に対する人事権、給料の決定権が無い等、こんな過酷な条件は日本の指導者の中で、学校以外にはないように思えます。流通コンサルタント業界で随一の上場企業、船井総研創業者 船井幸雄先生との縁がございまして、『船井幸雄と本物人』という本に私が載り、それを読まれた当時美保関小学校 岡美慧子校長先生から講演依頼を受け、島根県女性校長、教頭会総会で講演させて頂いたのがご縁で今日のこの日があるわけでございます。

先進国は「我欲から芽生えた夢の時代から社会環境から生まれた志の時代に」、
「政治家、官僚、財界の三位一体の時代から市民に支持を受けた総合人間力の要求される事業家の時代」に移ろうとしているように思われます。では、夢は必要ないか。そういうことはございません。お手元の講演資料に書いておりますように、この夢を芽生えさせ具現化させてくれるのが、「志の人」であります。いろんな資料を参考にしていますが、大部分は私のオリジナルであります。これは完璧ではありません。皆様の知恵を借りながら、より完璧なものに仕上げていきたいと思っています。「自己実現が、公私の対立、妥協の時代から、公益と私益を論理的に整合性をとり、実行は協調競争で」の時代へ変わったと認識しています。

つい先日、「山陰中央新報」に、こんな記事が載っておりました。

『島根町の女子中学生が、コスタリカの映画を上映した』。コスタリカはご承知のように、世界でただ一つ軍隊を放棄した国家であります。そして、その女子学生たちの熱意に打たれて、映画を作った女性監督さんも来られて、講演なさった。本日私の講演の段取りをしてくれた、HNS 研究所の須藤研究員もこの会に参加し、非常に感激して帰ってまいりました。軍隊をやめる代わりに何をしているのか。「コミュニケーションの在り方について、小学校から徹底的に教

育をする」。こういうことだったそうであります。では、「コミュニケーションとは、一体何なのか」。

このことが、日本では非常に軽く扱われております。私は、「読み・書き・そろばん」ということが教育の原点である、ということをよく聞きます。これは、職人と兵士を作るために考え出されたものであるはずであります。

まず、お互いのコミュニケーションを通して行動することにより、脳の中に立場という概念が生まれ、社会を支える一員としての自覚が生まれるわけでありませぬ。

私は、対数、因数分解、英語、国語、漢文、歴史の年号、人名、地名暗記教育等、大の苦手でした。たくさん習いましたけれども、学校を卒業してほとんど使ったことがございませぬ。

それは、余程特殊な人ならば使いますけれど。なぜ、学校教育で、社会に出てほとんど使わないことを教えるのだらう、とよく考えてみますと、実は、脳が進化するのを妨げるためにやっているのです。では、妨げることによって、どういうプラスがあるか。

ちゃんとあるわけでありませぬ。同じことを繰り返しやっても飽きない。そして褒められれば、尊厳欲求を満たされれば、それを繰り返す。こういう人たちが生まれるわけでありませぬ。大局観を持った人が出てこない、民族存亡の大きな過ちを繰り返す職人国家は、このようにして生まれております。これがそれなりに一定期間、機能する為には、現実が貧しく、努力すればそれなりに報われると信じられ、自然または人為的な保護者の存在が前提条件であります。我が国は近年単純労働の領域を、どんどん中国、アジアに流出させています。これは避けられませぬ。集団の誤謬により、生存コストが極端に高く、持続不可能な国家を造ってしまいました。我々が食卓に座りますと、七十パーセント近くが輸入食材であります。そしてそれを調理する、あるいは運んでくるエネルギーは、百パーセント輸入であります。

戦前はそんなことはありませんでした。食料も、運んでくるエネルギーも、全てが日本の国内で賄われていたわけでありませぬ。私が小さいころまでは、馬車引きさんがいました。今はいませぬ。馬は草を食べさせればちゃんと仕事をします。そして小学校の頃には、家には耕運機、トラクターはありませぬでした。牛の尻をパチンとたたきまして、田んぼを耕していました。

私も小学校五、六年生の時に経験があります。ということは、我々が一生懸命努力して、海外の人たちとうまくやっていく以外に生きられない。逆に言えば、楽を追い求めて一生懸命努力して、生存基盤をぜい弱にしてきたのが、戦後の歴史なのです。これが日本の社会システム、そしてその中に組み込まれた教育であります。それを、いいとか悪いとか言っても始まらぬ。

事実は事実として認め、そうなった背景ときっかけ、プロセスを研究、置かれている現実を直視、「災い転じて福となす」。これしかないわけです。いや、こんな素晴らしい事ができる時代に今我々は生きています。では、そういうことをした我々は、世界の人類の、あるいはアジアの中で一体どんな使命を担えば論理的整合性がとれて、且つ、そういう食料とかエネルギーを買っている相手から、信頼と尊敬、あるいは宇宙船地球号乗組員のパートナーとして認めてもらえるのか。これが、より健全な考え方であると私は思っています。

人間は、短期間でみますと、一見無駄なことをやっているようでありますが、「人類の歴史」、こういう視点から考えてみますと、何も無駄なことをやっていない、ということに気がつくはずです。この話をすると長くなりますので、この辺で終わりたいと思いますけれども、私は、皆様方にぜひ実行していただきたいな、と思うことがございます。

まず一つ目に、歴史教育を現在からさかのぼって教えていただきたい。日本の歴史教育は、古代からどんどん現在に近づくように教えられています。「江戸時代が終わり、明治維新、日露戦争まできました。学期末になり時間がありませんのでこれで歴史の授業は終わりにします。後は皆さんで勉強して下さい。」こういう具合になっています。これでは、歴史と自分との間に溝が出来てしまいます。今までとは逆に現在からさかのぼって歴史を学ぶ。

そして、自分、家族、地域、日本、北東アジア、アジア、世界の相関関係の中で歴史を学び、考える。そして自分が主人公だったら、その時代背景の中でどう考え行動するのかを思い浮かべ、ディスカッションする中から自分自身が歴史の一コマであるという、歴史に対する責任感が生まれ、感謝の知の海に浮かぶ自己が形成され、どういう社会であっても幸福な自分を作ることへつながります。

二つ目に、まず社会のことを、生存条件から考える、ということであります。子供たちにわかりやすく教えていただきたいと思います。わかりやすく言いますと、「皆さん、持ってきた弁当を開けましょう。おかずの何割ぐらいが輸入でしょうか？あつ、このあじの干物はオランダから、この焼き鳥はタイから、そうすると七割の物が輸入品ですね。皆さんは日頃一番先、誰の事を考えますか？」そうしますとだいたい「家族、友達、先生」、このように答える方が多いはずで

す。ちょっと変ではありませんか？皆さんが生きていくためには、食料が最も大事ですね。お父さん、お母さんが働いて、お金を得、スーパーで買って来て調理をしてもらい、子供は生きていくことができます。しかし働いているからと言って、輸出先が日本に回してくれなかったら、食べられないわけでありまして。ということは、社会がある。その社会というのは、先ほど言いましたように、

最も重要な生存条件要素であるエネルギー、食料から考えますと、日本の場合、社会とは世界と同義語であります。

世界が、アジアが、日本が、島根が、松江があつて、その中に家庭があつて、そして今ここで我々が生きています。このような学び方をすることにより、全体からものを考えて部分に入っていくという人間が生まれるわけでありまして。こういう教育をせずに、「お前は駄目だ。森を見ずして木ばかり見ている。」こういうことをおっしゃるわけでありまして。なぜ、そういう当たり前のことを当たり前のように文部省は言わないのか。こういうことを言うと、自分たちの足元に火がつくからです。

お配りした資料の中に、『七つの習慣』という本が紹介されております。世界で三千万部売れたと言われております。この本は、アメリカ人のポールさんという、私と三年ほど前から付き合いのある方が紹介してくれた本であります。私が彼の前でスピーチをした時に、「あなたは、この本を読んだことがあるか」「いや、私は読んでいない。」「あなたの言っていることの大部分は、この本に書いてあるよ。私は、あなたが読んでいるかと思ったら、読んでないのか。それはすごい。」と言われてました。

いろんな方から「あなたの話はよくわからない」という話を聞きます。私も面倒くさいものですから、「私も何十年、金と時間を掛けてやってきたことが、二、三時間の話でわかったら『あんた、その程度のことをやるのに何十年もかかって、何億も金をかけているのか。あほじゃないか』と、こう言われるに決まっているのであります。分からなくて当たり前なのです。

二、三時間で分かれたら私はたまったもんじゃありません。私の立場にもなってほしい。」と、最後には笑い話でお話しいたします。もう一度、「なぜ、子供たちに夢がないのか」こういうことも考えてみますと、意外なところに、すぐ明日からでもできるところに、その方法を発見することができるはずであります。

二宮尊徳という方が、江戸時代にいらっしゃいました。昔は学校に、二宮尊徳の銅像がございました。私の最も尊敬する郷里の偉人、周藤彌兵衛さんよりも新しいのです。我が村・八雲村の周藤彌兵衛さんは、二宮尊徳さんより五十年ぐらい古いのです。「五十・六十、花ならつぼみ。七十・八十、働き盛り。九十になって迎えが来たら、百まで待てと追い返せ。」

こういう話がありますね。政治屋さんが、これをもじっているいろんなことを言っています。周藤彌兵衛さんは「毎年のように洪水が起きる。これではどうにもならん。何とかせなあかん」ということで、五十七歳で一念発起いたしました。

周藤家というのは、実はリストラ一家なのです。今はリストラ時代ですから、

現代人にとって生き方を考える上で大変参考になる、と思っています。どうい
うことかと申しますと、毛利藩というのは、中国五県を治める太守でしたが、「関
ヶ原の戦い」で西軍について敗れ、徳川家康より、お前は罰だ、ということで
萩の方に押し込められたのです。教育が非常に熱心でした。優秀な幹部がたく
さん育っていました。狭い萩では生きていけない為、それぞれの赴任地で土着
したのです。だから周藤家は周防の方から来たと言われていました。そういう人
たちを、松平藩は地元の人たちと藩士との緩衝役として使い、うまく地元の人
たちを治めたのです。

時間が二時四十分ということでございますので、最後に、これから核心の話
に入りたいと思います。これからの日本列島の基幹産業は一体何にすればよろ
しいのでしょうか。国際化の時代は基幹産業を持たないと国民が生きていけ
ない過酷な社会です。現在、交通事故で、約一万人弱亡くなっています。自殺者
がどれくらいかご存じですね。三万人強です。

実際はその倍、六万人とも言われております。「内緒にしておいて」こうい
うのがあります。

「交通戦争」、こういう言葉は聞きますけれど、「自殺戦争」、聞いたことな
いですね。島根県はついこの間まで、長い間、人口の割合に対する自殺者数が日
本一でした。今年は第五位だそうです。経済がどんどん厳しくなりまして、全
国で産業が発達した所ほど、現在大きなダメージを受けています。

島根県は公共工事で生きてきました。ですから、今のところ変化が緩やかで
す。この結果、自殺者の順位が大分下がってきました。「がん」は多いですね。
なぜ、がんが多いか。ストレスですね。もう一つ、「ぼけ」が多いです。

つい先日、四年前知り合ったスウェーデン人のホームマルク夫妻と食事をしま
した。ご本人はスウェーデンの会社と、日本の会社の橋渡し、奥様は、聖路加
病院で長い間看護婦長をなさった後、医学界のことが詳しいのを生かして、全
国の歯医者さんを回って、新しい歯の治療方法の普及のお仕事をしていらっし
やいました。そして最近、ボランティアに専念なさっています。これから年
末にかけてスウェーデン大使が替わられる、ということから、「その交替式の
コーディネートを、今度私がやるんですよ。」とおっしゃっていました。スウェ
ーデンという国は、私も何回か行きましたが、非常に魅力的な国です。よく「山
陰は暗い」とか言いますが、向うはとんでもないですね。本当に薄暗い
です。これは、「山陰が暗い」なんていう代物ではないです。

そこで「高福祉国家」が出来ている。私は、そのことは知っておりましたの
で、ちょっと聞いてみたのです。「日本は、先進国の中で最も早いスピードで高
齢化が進んでいる。その中で我が島根県は日本一高齢化率が高く、全国平均の
十年先の状態です。ということは、ここは高齢化問題が最も顕著に表面化して

いる世界一のモデル地域にもなれるわけです。」こういう話をしました。ところで、生まれたら必ず、年をとって死ぬわけでありませうけれども、死ぬまでにある一定の期間、人様のお世話になるわけですね。奥さんか、旦那さんか、あるいは老人ホームでお世話になるか。要は他人の介護を必要とするようになるということです。

今、大きな社会問題になっていますね。さて、この「人様のお世話にならないければならない介護の期間はどれぐらいですか?」「皆さん、平均どれぐらいだと思いますか?」その方は、「日本人の平均は、四、五年ではないか」と、このようにおっしゃっていました。長い人は十年ぐらいですね。

「スウェーデンはどれぐらいですか?」と、私はお聞きしたのです。皆さん、どれぐらいだと思いますか?「二週間」。年をとって、だれも老いる。そして死が来る。その時に、人様のお世話にならないと生きていけない。こういう期間が、日本人は平均が四、五年、スウェーデン人は、二週間。これは大変なことです。私は、「ぜひ、その話を島根県に来て講演してほしい。」と、すぐお願いしました。そしたら、先ほど言いましたように、スウェーデン大使の交替式があるので、「年内はちょっと無理だ」と。「では、来年ひとつよろしく」ということで、来年春予定している孔子、孟子、周藤弥兵衛、清原太兵衛の銅像設置、序幕記念セミナーで日本初公演をお願いしたいと。その人の妹さんも、スウェーデンの隣の国、フィンランドで、同じように高齢者ケアの仕事をなさっておられます。皆さん、聞いてみたいと思いませんか?私の仮説ですが、だいたい原因はつかめているように思います。

「コミュニケーションと文化」の中にこれが隠されています。私の父が四十九歳の時に危篤になりまして、「親戚縁者全員集まって下さい」と、医者に言われました。「お前、覚悟しとけよ」と、私も叔父から言われて、「わかった」と。それから、二回ほど救急車で運んだことがございますが、今八十四歳で、ぴんぴんしております。私が韓国で兄弟以上のお付き合いしている朋友が、「小松さん、あんたはいいなあ。いいことしてるな。」こう言ったのです。「あんたとこのおやじさんにこの間会って、農業をやっている父の姿を見ながら『お父さん元気ですねえ』。『ああ、毎日草と戦いですわ』」と。その方のお父さんは、学校の校長先生だったのです。

彼は、韓国一の企業集団サムソンの元空調機事業部長。日本のIT産業は、サムソンに追い詰められています。お父さんは、釜山の郊外で校長先生をしていらっしやいました。これから親孝行、ということで、『おやじ、田舎におらんで、ソウルへ出て来いや』ということで、年老いた父親をソウルのマンションに引き取ったのでした。草とか、花とか、木とかとの触れ合いも急速に少なくなり、また昔からの友達とも離れお付き合いもできない。三年で、ぼけてしま

われたそうです。五年間、ぼけた父親を介護されました。「おれは大失敗した。親孝行というものがどういうものか。ただ楽をさせればいい、というものではない」と。

これから日本の高齢化問題はどうかあるべきか、あるいは、医療はどうかあるべきか、一度原点に戻って考える教訓になると思います。この問題は避けることができない事であり、真正面から受け止めざるを得ない状況が必ず来ます。なぜ子供たちがおかしくなるのか。今の子供たちが大人になった時には、この問題は逃げられない深刻な問題として、立ちはだかつて来ます。夢が芽生えないのは、子供の立場に立てばわかるはずであります。「親子」という字を頭にイメージしてください。「木」の上に「立」って「見」る「子」と書いてあります。「論語」の中では、先生のことを「子」と申します。「子曰く。」私は日中英三カ国対訳論語を出版致しました。

子供が何であんなことをするのだろう、何であんなことを言うのだろう、子供に近寄らず木の上に立って観察、そして、いろいろ仮説を立て、子供に聞いて学ぶ。この思考回路が脳の中に出来た人のことを「親」と申すわけでありませぬ。世の中には、「親が子供を導く」と言う人もいますが、飢餓と殺戮の終わった時代には「小さな親切、大きなお世話」であります。それは、飢餓と殺戮の状態を、大部分の国民を職人と兵士に仕立て上げ、いかに効率良く終わらせるかを命題の元に考え出された教育システムのはずです。

いろいろとお話を申し上げましたけれども、これからの一番大事なことは、四パーセント右脳しか機能しないように作られた「霸道文化」から、無限の脳が進化する「王道文化」へのパラダイムシフトが健康、環境、平和を追求する上で必要不可欠であります。そのための第一歩が「歴史を現在からさかのぼって教える」。二番目が、親と子、「子供と先生との関係の見直し」、であります。そして三番目に大事なことが、そこの土地の気候風土、そして歴史、地政学的な使命、というものを研究することにあります。

中海、宍道湖では、最近魚がたくさん死んでおります。まだその原因は、特定されておられません。これは私見でございますけれども、「すさまじいことが起きている」という具合に、私は推察しております。アメリカの東海岸で起きていることに関する資料を、お手元に入れておきました。これから先はかなりデリケートな問題でございますので、資料をお読みいただきたいと思っております。つい先日、小松電機産業環境事業部の若手三名のエンジニアを、ドイツを中心としたヨーロッパの下水道施設視察に行かせました。そしたら、びっくりして帰ってきたのです。

「社長、大変なことがわかりました。」

「何がわかった。」

「ドイツでは、下水処理プラントが造られているが、水をライン河に流すときに、塩素滅菌してないのです。中海・宍道湖圏の下水処理プラントはみんなやっているんです。」

「それがどうした。」

「その話をしたら『クレイジーだ』と言われました。『塩素というのは猛毒だ。この塩素を下水処理の出口の所で入れる？何のためにそんなことをするのだ』と。大腸菌を殺さなければいけないことが、法律になっていますと答えると、『大腸菌は、田んぼの中にも、畑の中にも、どこにもいるよ。そんなことに塩素を使ったら、この世の中で出たことがないような獰猛な微生物が出てきて、皆さんが食べる魚介類に食らいつくのですよ。それを、あなた方は食べるのでしょうか。それだけではないよ。極端な場合にはこの菌によって魚介類が大量死滅、死骸からその微生物が空気中に上がってきて、肺呼吸している生物にみんな入るのだよ。』

そしてこれが、『ぼけ』の大きな原因の可能性があるんだ。」

実は、日本もドイツも戦争に負けました。そのときに、日本人は、頭からDDTをかぶせられた。そして、「日本人は外で平気で小便する。あれが川に流れるのだから、あの水を飲むのはかなわない。」ということで、「塩素滅菌する」と。それからずっと塩素滅菌なのです。ドイツは「占領政策は終わった。やれやれ、アメリカさんは帰ってくれた。すぐ塩素滅菌をやめろ。こんなことをやっていたら、我々の民族は全部滅びてしまう。」このように、何の疑いもなく前からやっていることを、「そのことが始まったきっかけは？」「背景は？」「プロセスは？」こういうことを研究せずに鵜呑みにやるのが、いかに恐ろしいか。

もう一つアメリカのジョークを申し上げます。

道路に蛇の死体と弁護士の死体がありました。弁護士の死体には「弁護士」、蛇の下には「蛇」と看板が立ててありました。さて、どちらにタイヤのスリップした跡があったのでしょうか。蛇の前にはタイヤのスリップした跡がありましたが、たくさんの人々の憎しみを買っている弁護士の方は、次々と車が死体の上を通り過ぎていました。主権在民、自由、基本的人権の尊重と、司法・行政・立法三権分立制度を生み出した意図と時代背景、場所、きっかけ、そしてこの制度の確立に至るプロセスは？なぜ日本では基本的人権犯罪の六十五パーセントが弁護士を含む法務局で起き、基本的人権犯罪デパートと言われるのか？これらの解明と改革の処方箋のカギは？これらは、今までお話してきた中に全て隠されています。

人類は、DNAに書き込まれていない「二足歩行」を人工的に始めたことから未熟児で生まれるようになり、自然の摂理から逸脱が始まり、今日に至ります。そうすると、哺乳類になる前の段階の脳、すなわち爬虫類の脳に制御さ

れ、この世の中に出てくると考えています。ですから、大体の人が蛇が嫌いがあります。自分のこの世に出てきた時の姿ですから。ところが、小さい時から蛇と仲良くすると、「蛇から離れられない」と。こういう人が 出来上がるわけです。

人間自然科学研究所は、こういうこともいろいろと研究しています。今日日本は、法治国家の根本を揺るがす悪徳裁判官、悪徳司法関係者、悪徳警察官、悪徳弁護士が大量に出てき、まさに社会が崩壊しようとしています。戦前は、これに思慮の浅い軍部が悪徳財界人に踊らされ、原爆投下にまで至ったわけです。形は違いますが、歴史を研究、鏡として来なかったつけがいつぺんに表面化、第二の敗戦を迎えようとしています。本当の民族の崩壊は、これからが本番です。また、バブル発生から崩壊、そしてその後の失策により返済不可能な借金を作り、子供・孫に送ろうとしています。また、歴史の中で生まれた諸外国との怨念、恨みも我々の代で解決せず、先送りにしております。日本人である以上、この国家の作った借金と怨念や恨みから逃れることはできません。「先輩が造った、鉄道、道路、港湾は、我々が使わせてもらう。

怨念・恨みは、おれたちがやったことではないので知らない。先輩がやったことだ。」都合のいい物は受け継ぐ、悪い物は知らない。それでは世界は許しませんし、また自分自身を偽ることもできません。この二つを兼ね備えれば、『吸血鬼』と呼ばれても仕方ありません。私はすぐ言葉の定義を調べてみるのですが、要は、逃げるできないものを子孫に先送りする。お釈迦様はこうおっしゃったそうです。「人に影響力を及ぼすようになったら、知って犯す罪よりも、知らなくて犯す罪の方がはるかに重い。」人に影響力を及ぼさない人は、「すみません、知りませんでした。」「そうか。それはしょうがないな。二度とするなよ。」と、これでいいわけであります。人に影響力を及ぼす立場の人はそうはいきません。その理由は、詐欺師でも「これは悪いことだ」という具合に自覚のある人ですと、どこかにスキが出て、ばれるわけであります。「自分が悪いことをしている、だましている」という自覚のない人がやりますと、大衆は鵜呑みにしてしまい、ころっといかれるわけであります。ヒトラーはこのように登場してきたと言われております。私が言ったわけではございませんので、ご異論のある方はお釈迦様の方に問い合わせせてみて下さい。

いろいろとお話申し上げましたが、私の話が少しでもこれからの学校教育にお役に立てばこれ以上の喜びはありません。

予定時間を五分ほど過ぎましたので、この辺で終わらせて頂きます。長時間、御静聴ありがとうございました。

感謝

2002年10月11日 第49回島根県小学校長研修大会